



UICC 世界対がんデー2014 公開シンポジウム

子どもにがん予防の姿勢を作る

三重県総合文化センター大ホール

平成 26 年 2 月 4 日 (火)

主催：UICC 日本委員会、日本対がん協会

後援：三重県、三重大学、三重県医師会、三重県栄養士会、
三重県看護協会、三重県教育委員会、
三重県公衆衛生協会、生命の駅伝実行委員会
日本癌学会、日本癌治療学会、厚生労働省、文部科学省

プログラム

平成26年2月4日（火曜日）
三重県総合文化センター大ホール

2:00 開会の言葉

内田淳正（三重大学 学長）

田島和雄（UICC 理事、三重大学医学部 病院長顧問）

2:10

座長：田中英夫（愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 部長）

1. 小学生のがん予防教育を考える

北川知行（UICC 日本委員会 委員長、がん研究所 名誉所長）

2. 食教育によるがん予防の重要性

岡崎光子（香川栄養学園 女子栄養大学 名誉教授）

3. 喫煙と肥満はがんのはじまり

浜島信之（名古屋大学医学系研究科 医療行政学 教授）

4. 「生きる力」を育む健康教育の推進—教育現場から

大澤正則（埼玉県川口市立芝富士小学校 校長）

5. 子どものがん予防教育に先ず国が始めること—行政の立場から

坂口 力（国際医療福祉大学 特任教授/初代厚生労働大臣）

3:50

休憩

4:00

座長：垣添忠生（日本対がん協会 会長）

公開討論会：子どもにがん予防の姿勢を作るために何が必要か？

4:55 閉会の辞

田島和雄（UICC 理事、三重大学医学部病院長顧問）

UICC 世界対がんデー2014 公開シンポジウムの開催にあたって

田島和雄

UICC(国際対がん連合)日本代表理事
三重大学医学部附属病院 病院長顧問

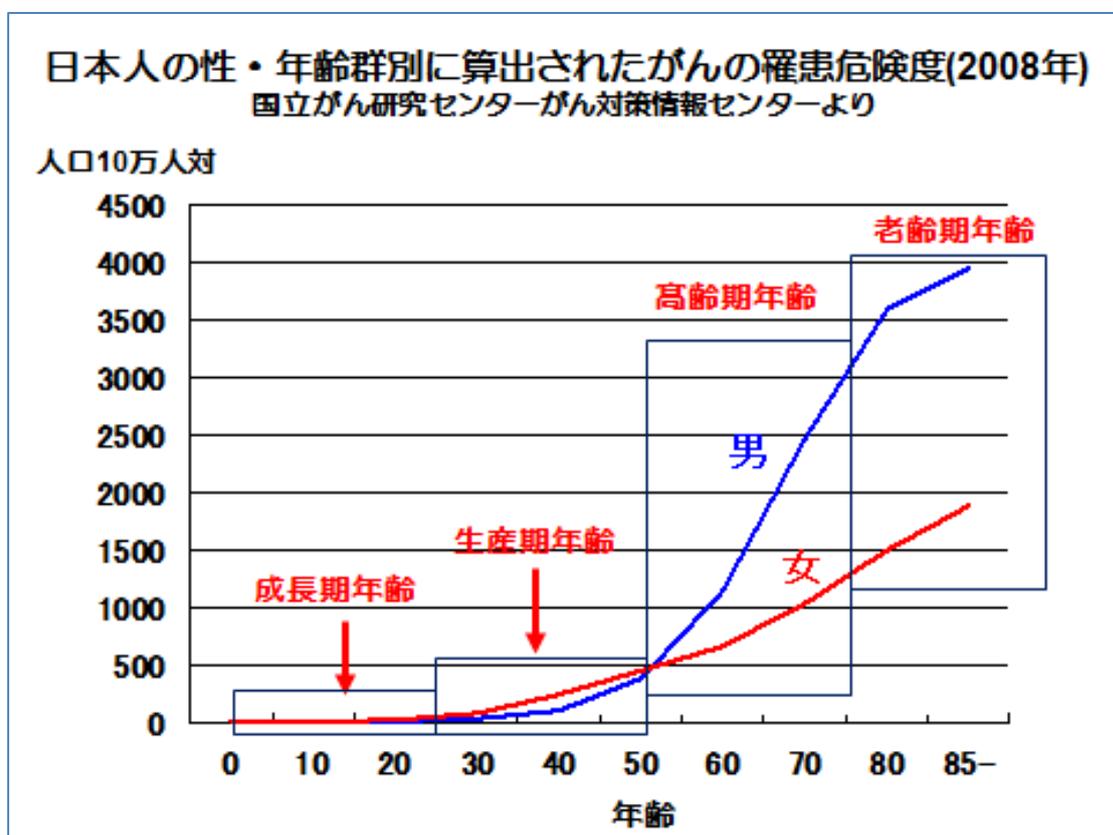


今やがんは国民病となり、日本人の二人に一人はがんに罹り、三人に一人はがんで亡くなる時代となりました。さらに、人類がこれまで経験したことのない超高齢化社会を迎えることになり、がん罹患者やがん生還者はますます増加し、国も医療費の高む将来のがん対策に苦慮しております。国際的にもアジアを中心とした開発途上国においてがんの犠牲者が著しく増加しており、世界保健機関(WHO)もかつて展開してきた感染症対策のみならず、数年前から一次・二次予防を中心とした対がん活動に踏み出してきました。

国際対がん連合(UICC)は国際的な対がん活動を展開するために非営利団体(NGO)として70年前に設立されました。現在では世界140カ国から700施設以上が参加する巨大な国際対がん組織として活動しております。日本からも全国から学会、対がん協会、大学、病院など30施設が参加しており、三重大学も昨年から参画しております。そして、UICCは7年前に2月4日(立春の日)を世界対がんデー(World Cancer Day)と定め、世界各国、地域で対がん活動を推進していくための様々なイベントが実施されております。日本でも東京、大阪、札幌の各都市でこれまで5回の公開シンポジウム・パネル討論会を開催しておりますが、今年は三重県で公開シンポジウム、およびパネル討論会を開催することになりました。

今回の主題は「子どもの時からがん予防の姿勢をつくる (Form Cancer Prevention Attitude from Childhood)」としました。がんの危険度は加齢とともに増加し、50歳を越えると激増(次頁図参照)します。それを予防するためにはライフステージの早期(成長期)から生活習慣の改善などに取り組むべきで、早く始めるほど効果も大きく、幼・小児期から始めるがん予防の姿勢作りが必要となります。最近になってWHOやUICCも子どものがん医療対策、さらにはがん予防教育を重視しております。日本でも文部科学省は本格的に子どものがん教育に乗り出すと言っております。生活習慣に関連したがん予防の基本三原則は、バランス感覚を養う食育、肥満防止や健康増進のための適度な運動の推進、それに防煙・禁煙・分煙、などです。そこで、本シンポジウムではあらゆるライフステージにおける健康増進につながる子ども時代からの生活習慣病予防の基本となります食育、運動による肥満防止、防煙(禁煙・分煙)、などについて日本を代表する研究者にわかりやすく紹介していただき、子どものがん予防の姿勢作りの重要性について教育の現場と行政の立場から言及していただきます。

しかしながら、子どもにがん予防の姿勢を植え付けることは方法的に容易ではありません。特に、がんと接する機会がほとんどない小学校低学年の児童にがん予防の説明をすることは至難の業でして、そのノウハウについては新しい発想で検討していく必要があります。そこで、本シンポジウムを受けたパネル討論会においては演者のみならず、会場の参加者の方々からも広く意見を求め、今後の方策について検討していくことになっております。基本的には大人が子どもと同じ目線でがん予防の姿勢造りに取り組む必要があるものと考えます。本パネル討論会の内容が、子どもの健康増進のための姿勢作りの進展に繋がっていくことを切に期待しております。その健康増進活動が日本の将来の医療費低減にもつながり、今まさに教育者、保護者、医療関係者、栄養士、保健師、さらに行政担当者ら一致団結して取り組む課題と考えます。



最後に、本企画を主催者として支援して下さいました UICC 日本委員会や日本対がん協会を始め、また、後援して下さいました三重大学、三重県、三重県医師会、三重県栄養士会、三重県看護師会、三重県教育委員会、生命の駅伝実行委員会、日本癌学会、日本癌治療学会、厚生労働省、文部科学省に深謝致します。

シンポジウム

子どもにがん予防の姿勢を作る

座長 田中英夫（愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部 部長）



..... MEMO

1 小学校のがん予防教育を考える

北川知行（UICC 日本委員会委員長、がん研究所 名誉所長）



1. なぜ小学生からのがん予防教育か。

超高齢者社会になり、がんを始め糖尿病、高血圧、心血管病などの慢性疾患が急増、それが一つの要因となって医療費が急騰し続け（税込の80%以上）医療と社会保障システムの基盤を揺るがせている。これらの慢性疾患は、正しい生活習慣によりかなり予防が可能（40%以上）で、その予防は国民の健康寿命の延伸と医療費の抑制に大きく貢献する。子ども達にがん予防の生活習慣を躰よう。

2. 小学校 3～4年の低学年から開始する：躰ならば早いうちに開始するのが有効である。がん予防の姿勢を作る事を主眼とするならば、その教育は3～4年の低学年から始めることが可能でありしかも有効ではなかろうか。“道を渡る時は左右を良く見てから”、“保存の悪い生ものはやたらに口にしない”、と同じレベルである。低学年性は素直だから、先生の言う事がストーンと落ちる。高学年では“躰”にはすでに反発する傾向が生じている。

3. がんの知識注入には走らない：“がん”は間口が広く奥行きは深い。DNA、遺伝子、細胞、器官（臓器）とその機能、生体の恒常性、浸潤、転移、病気としてのがん、原因、がん化の機序、一次予防と二次予防、治療、患者支援、社会的問題、etc. 小学生に、系統的、段階的ながんを教える事は困難である。必要もないし、そんな事を課せられたら先生もたまらない。

4. “がん”の最小限の理解から出発：“がん”は「体の中にならず者の細胞ができ、放っておくと増えてからだをむしばみ、人を殺す事もある怖い病気」くらいの理解から、話しを進められるのではないか。

5. “だんだん病”の概念を教える：従来の保健では、インフルエンザや食中毒や虫歯などの急性病とその予防ばかり熱心に教えている。慢性病、特にがん、糖尿病、高血圧（心血管病）という“だんだん病”があること、“だんだん病”は、若い頃からの生活習慣、特に喫煙と肥満が大きな原因となって大人になって生じることを数字を出してしっかりと教える。

6. “だんだん病”は予防可能だ：たばこは吸わない、肥満を避ける（食べ過ぎない事と運動すること）ががん細胞を作らないことが一次予防。残念ながらがん細胞が出来てしまったら、早く見つけて手術で取ってしまうのが二次予防。いずれも病気としてのがんを防ぐ、ということ教える。

7. **子どもと共に未来を見つめる**：先生と子どもが一緒になって、人生の先を眺め、健康は大事だと思う機会となれば、とても良い。先生が子ども達に、みんな大人になってもずっと健康でいてほしいと願っている気持ちを伝える機会とする。子ども達が、自分の健康は自分で守るのだなと自覚することができれば、教育としては成功だ。

8. **理科の時間や道徳の時間も生かす**：理科の時間を生かして、タバコの中にどれほど有害物質が含まれているか、理科の実験で印象づける。道徳教育の時間を生かして、タバコは他人に迷惑をかける；受動喫煙でもがんになる。みんなのものである空気を濁して人を不愉快にする。過敏症の人は息ができなくなる。自分の楽しみで人に迷惑をかけるのは良くない事だからしないこと・・・と教える。

9. **担任の先生の活躍に期待する**：保健の先生だけでなく、担任の先生の活躍を期待する。

10. **学習指導要綱の充実**：“だんだん病” 予防の姿勢を作るという目的意識で貫かれた指導要綱にする。“だんだん病” の予防は、個々人の健康維持に止まらず、医療と福祉行政を健全に進めるために、国として必要な施策であることを、教師には理解させること。

11. **学校は禁煙**：先生が実行していないのでは、禁煙教育は出来ない。学校は禁煙を徹底させる。近い将来は教師（と医療、医療行政担当者）は禁煙にする。

..... MEMO

2 食教育によるがん予防の重要性

岡崎光子（香川栄養学園 女子栄養大学 名誉教授）



1. 食教育（食育）について

我が国では、平成17年6月に「食育基本法」が制定された。その法律の総則第2条には、次のような内容が記載されている。

【食育は、食に関する適切な判断力を養い、生涯にわたって健康な食生活を実現することにより、国民の心身の健康の増進と豊かな人間形成に資することを旨として、行わなければならない。】

【第20条：国、地方公共団体は、学校、保育所等において魅力ある食育の推進に関する活動を効果的に促進することにより、子どもの健全な食生活の実現及び健全な心身の成長が図られるようにすること。】

したがって、「食育」は、人（子ども）を良くするために実施するための行為と考えられる。すなわち子どもを、①量的に良くする（成長を促す、健康の維持・改善）、②質的に良くする（豊かな心を育み、円満な人格形成）ために行う行為と言えよう。

2. がん予防のための食育

1) がん予防には、①ガンに罹りにくくすること（一次予防）、②早期発見、治療を行い、がんによる死亡率を下げること（二次予防）が必要である。

（引用文献；田島和雄著：『私たち自らが目指すがん予防のための知恵』）

2) がんの一次予防のために行う食育では、子ども達に何を伝えるべきか。

（1）栄養のバランスをとること

①栄養・運動・休養のバランス

健康づくりのための食生活指針、運動指針、休養指針

②栄養素のバランス；エネルギーと保全素のバランスをとること。

③食物のバランス；1日に必要とされる食物（種類、量）を適切に摂取すること。

赤群（魚・肉・豆類・乳・卵）、黄群（穀物・砂糖・油脂・いも類）

緑群（緑黄色野菜・淡色野菜・海草）

（2）食事内容のバランスをとること

①一汁三菜（ご飯・汁・おかず・漬け物）

②味・色のバランス；五味（酸味・甘味・苦味・辛味・旨味）

五色（赤・黒・青・緑・黄）

(3) 生活リズムのバランス（規則正しい生活習慣）をとること

1日の生活リズムを整えることの重要性を伝える。そのためにはまず、1日のスタートは朝ご飯をきちんと食べる→できるだけ早寝をすること。夜食は消化のよいものを選び、眠る1時間前までに食べる→できるだけ早起きをすること。朝は余裕をもって出かけること。その際にはきちんと排便を済ませること。

(4) 自然・人・食文化に触れ合う機会をもたせること。

良い自然環境の中で動植物に触れ合い、人と円滑にコミュニケーションをとり、楽しく美味しく食事をとり、ストレスをできるだけ溜めないようにする。

..... MEMO

3 喫煙と肥満はがんのはじまり

浜島信之（名古屋大学大学院医学系研究科 医療行政学 教授）



喫煙、感染、多量飲酒、バランスに欠ける食事、運動不足、肥満はがんの発生要因であり、このことは生活習慣を変えることによりがんを予防できることを意味している。ここでは、喫煙と肥満についてがん発生の生物学的なしくみについて簡単に説明する。

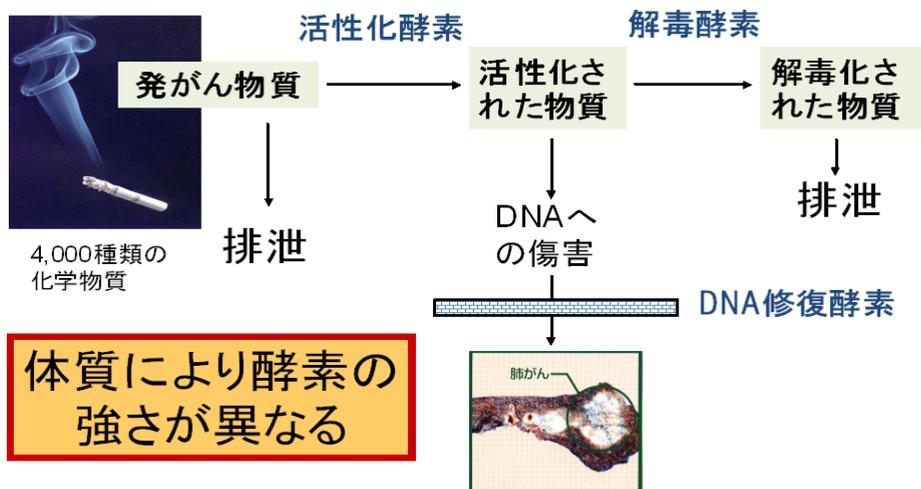
タバコの煙の中には 4000 種類もの化学物質が含まれており、そのうち約 60 種類は発がん物質である。発がん物質の一部は直接排泄されるが、残りは体内で活性化酵素により活性化され、細胞の核の中にある DNA 分子に結合しやすくなり、解毒酵素により解毒され排泄される。DNA 分子は遺伝子を構成する分子であり、修復酵素が DNA に結合した発がん物質を取り除く時に、遺伝情報が置き換わることがある。このことにより、細胞ががん化することがある。酵素の強さは体質により異なっており、そのことによりがんになりやすい人となりにくい人にわかれていると考えられている。これまでの疫学調査により、喫煙が口腔、喉頭、肺、食道、胃、肝臓、膵臓、子宮頸部、膀胱などの発生率を上昇させることがわかっている (http://ganjoho.jp/public/pre_scr/cause/smoking.html)。また、呼吸器疾患、循環器疾患、小児の喘息や突然死等多くの病気を引き起こすので、病気の予防のためにタバコの煙を避けなければならない。

肥満は体の中（特に腹腔内）の肥大した脂肪細胞が蓄積することにより起きる。肥大した脂肪細胞からは病気を起こす物質（TNF α と呼ばれる物質など）が分泌され、インスリンやインスリン様増殖因子 1（IGF1）を上昇させ、細胞増殖を引き起こす。また、女性ホルモンであるエストロゲンを増加させる。このようことしくみから、肥満は閉経後の乳がん、食道腺がん、大腸がん、子宮体がん、腎臓がんなどのがんの発生率を上昇させる。更に、肥満は血圧を上昇させ循環器疾患になりやすくし、重い体を支えなければならず膝などに病気をおこす。

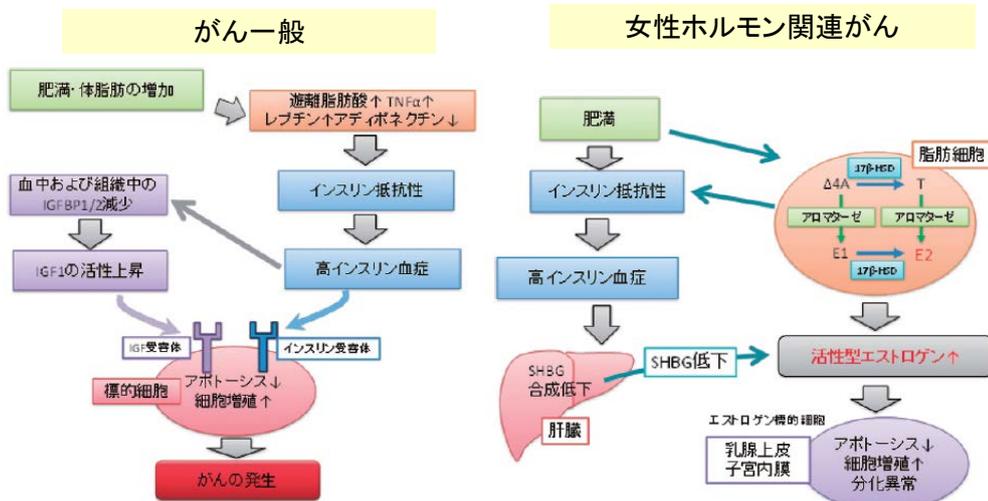
知識だけから行動が変容するわけではないが、子供たちにごんになるしくみのある程度説明することは求められ、わかるやすい教材の作成は有用であろう。

..... MEMO

喫煙ががんを発生させるしくみ



肥満ががんを発生させるしくみ



糖尿病と癌に関する委員会報告

糖尿病と癌に関する委員会: 春日雅人、植木浩二郎、田嶋尚子、野田光彦、大橋健、能登洋、後藤温、小川渉、堺隆一、津金昌一郎、浜島信之、中釜齊、田島和雄、宮園浩平、今井浩三
糖尿病56(6): 374-390, 2013 より

4 「生きる力」を育む健康教育の推進—教育現場から

大澤正則（埼玉県川口市立芝富士小学校 校長）

「生きる力」という言葉が広く社会に出て久しい。では、この「生きる力」とは具体的にはどのような「力」なのであろうか。私見ながら、言葉だけが一般化されて定着し、その解釈は個々に異なり、曖昧になっているようにも思う。本日のシンポジウムにおいて、「生きる力が備わっている子ども」とは具体的にはどのような姿であるのか、参加者それぞれの立場からお考えいただきたい。そして、ご自身が目指したい「育てたい理想の子ども像」を明確に認識する機会とし、今後の教育活動に活かしていくことを決意したい。



今、子どもたちを見ると、様々な健康危機のなかで生活しているという現実がある。

◆運動不足 ◆不規則な生活習慣と食生活 ◆生活習慣病 ◆人間関係づくりの困難性 ◆引きこもり ◆無秩序な情報機器の使用 ◆生活経験不足等、枚挙に限りがない。

現代社会に生きるこのような子どもたちに、どのような将来が待ち受けているのか、私の目には明るい未来が見えてこない。子どもたちの将来を左右するのは保護者、教育者、私たち大人である。現在のような食生活、日常生活を平然と繰り返していたのでは、子どもたちの健康に明るい未来はない。積極的に子どもの生活に立ち入り、改善を進めたい。

私は平成8年度、行政職として学校給食を主担当とする業務に携わって以来、給食はもとより食育、健康教育に広く関心をもって教育活動に取り組んできた。一方で、社会体育にも長くかかわっており、30年以上にわたって地域スポーツ少年団の指導者・団長として、小学生（男女）を中心にミニバスケットボールとサッカーの指導に当たり、広く地域の子どもの健全育成、体力向上、人間関係育成、スポーツ競技力の向上を図っている。

ここでは、私の勤務校における食育・学校給食を中心とした健康教育に重点を置き、また、社会体育の側面からの取り組みにも少し触れながら実践を紹介したい。

私は行政職6年、小学校教頭職3年・校長職7年の経験。埼玉県川口市は東京都に隣接しており、川口市立芝富士小学校は、大きな団地、住宅に囲まれた立地条件にあり、中国を中心とする外国籍児童の割合も2割を超える。平成22年度に学校給食において文部科学大臣賞を受賞した。私がまず着目したのが、学校の自然環境である。学校ファーム・ビオトープの改善と充実をはじめ、桃や梅、キウイなどの実のなる果樹を学年の教育課程に位置付け、地域の方々の協力をいただきながら、子どもたちの手で栽培・収穫活動を進めた。また、自校調理校という特色を活かして様々な形態の給食・交流会食を年間を通して実施しており、美味しく楽しい給食は本校の子どもたちの大きな自慢となっている。

社会体育においては毎週土・日曜日、現在は近在の小学校13校から多くの子どもたちが集い、スポーツを中心に全学年男女が交流して様々な活動を楽しんでいる。肥満傾向・運動が苦手・障害のある子等も受け入れており、個々の実態に応じた支援に努めている。

さて、学校給食においては食物アレルギーへの対応が急務になっている。私は昨年5月、文部科学省から委嘱を受け、「学校給食における食物アレルギー対応調査研究協力者会議」の一員として参加し、専門家の方々との議論を重ねてきた。安全であるはずの学校給食、子どもたちの将来に向けた健康の保持増進のために提供する食事でありながら、食物アレルギーを原因とする死亡事故を起こしてしまったという事実。7月には、亡くなられたお子さんのご両親とお話しをする機会をいただいた…。心からご冥福をお祈りする…。

最後に、冒頭に申し上げた「生きる力」について、みなさんはどのようにお考えでしょうか。私は「……………」のように考える。

今後も一人一人の子どもの将来の健康のために、できうる限りの努力をしていきたい。

…………… MEMO ……………

5 子どものがん予防教育に先ず国が始めることー行政の立場から

坂口 力（国際医療福祉大学特任教授/初代厚生労働大臣）

私は約4年間の厚生労働大臣の経験から、子どもの「がん予防」について議論をした記憶はなかったし、現在の担当者に聞いても省としての活動は行っていない。しかし、成人のがんについては、長い年月をかけての生活習慣や生活環境が原因として注目され医学的にも明確になっている。



今日はがん研究の専門の先生から多くの話があるので、私は角度を変えてこれからの行政や家庭における子どもを育てる立場の皆さんに対して、どのように協力して貰うのが効果的かについて触れたい。

国、都道府県、市区町村の保健担当者は、がんになりやすい生活習慣についての知識を勉強し、それを住民の皆さんに語りかける。多くの住民は医師や保健担当者、マスコミを通じて、がんにならない生活はどうあるべきかについての基礎知識をかなり持ち合わせている。検診を受けなければならないことも知っている。しかし、それを実行しているかどうかは別の話である。

人にはそれぞれの性格があり、食生活の好みも異なる。この生活習慣は悪いと知りつつその行動を変えられない人も多い。タバコと肺がんの強い関係は何回も聞いてはいるが止められない人はあまりにも多い。植物繊維の多いものを食べることが大腸がんの予防になると言われても、肉食を好み菜食を好まない人には実行が困難である。ストレスががんに関係することを指摘されても、些細なことにも悩み続ける人が多い。

行政は、子どもに対するがん教育を、そんな親達に頼むことになる。

両親の性格や趣向がそれぞれであるのと同じように子どもの性格や食への好みもまたそれぞれである。こうした中で、行政はどのように行動すれば良いのか。子どもと家族への対応について、私は公衆衛生に携わった若いころから、この難問と対峙してきた。

行政が行う内容には大きく分けて二つあり、一つは地域や団体、個人に対して命令、指導、監督を行う通達業務と、他の一つは地域社会や個人の人々の意見を集約する、陳情を受ける、情報を集める情報集約業務とが存在する。運動神経と知覚神経の両方の役割を果たしている。前者の通達業務はどれほど立派な内容であっても、大きな期待は持てない。しかし行政はこちらの方に力を入れがちであり、人員の配分も多い。後者の情報集約業務にはある程度の期待を持っている。しかし役所の中では重きを置かれない存在であり、人員も少ない。行政は命令、監督することを肥大化させ、意見の吸い上げは縮小化している。ここに行政内部の大きな問題がある。

本論に戻るが、子どものがん教育を行うには、両親とともに情報収集に参加させることが最も効果が大いと考えている。この結論は私の経験から得たものである。がん患者の出た家族と高齢になっても健康な家族とに分けて、簡単な食生活の記録を1か月間書き留めてもらい、みんなで比較検討したことがあった。健康な家族は普通の塩分量で菜食が多かったと記憶している。がん家族との違いがある程度浮き上がった。私たちの意図は、学問的に違いを明確にすることではなくて、食生活に関心を持ち、参加者に行動変化を呼び起こすことにあった。保健師さんから、付け加えて、がんになりにくい食生活の短い話をしてもらった。簡単な記録に参加することが主体であり、保健師さんの短い話は付け足しだった。話が主体で記録に参加することを強制したものでないところに注目を願いたい。

成人になってからのがん予防は勿論のこと子どものがん予防についても試みる意味があると考えている。

..... MEMO

公開討論

「子どもにがん予防の姿勢を作るために何が必要か？」

座長：垣添忠生（日本対がん協会 会長）

歯並びのひどく悪い子供。ハシを奇妙な形に握って御飯を食べている子供。あるいは、テーブルに両肘を着いて食事をしている子供・・・。

こんな子供の姿をときどき眼にすることがあり、一見がんとは無関係とも思えるが、かねてから気になっていた。日本顎咬合学会などでいろいろと教えていただくと、子供の口腔機能、食物を噛むことがなおざりにされてきた結果が蓄積されてきた一つの現象のようである。



子どもの頃から始る、現代人の咬合・咀嚼力の低下を放置すると、高齢化とともに進む生活習慣病や認知症の急増をまねく。子どもの噛む力が低下すると、成長や学習能力にも影響する。

その背景に、家族で食卓を囲み、おいしく食事をし、親子で会話を楽しむ機会が急速に失われつつあることがあるようだ。食卓は「正しく噛んで食べること」を学ぶ大切な場所であり、家庭でのしつけはここから開始されるはずだが、それが機能していない。

孤食する子どもが増え、柔らかいものを好んで食べる。歯応えのあるものを食べないと顎が発達せず、永久歯に生え変わったときに、狭い空間に歯が並ばざるを得ず、歯並びが乱れる。冒頭に記した子どものいくつかの姿は、こうした背景から生じるようである。

ここに述べたことは、「小学生のがん予防教育を考える」にも、「食教育によるがん予防の重要性」にも直に関わる。食物の内容も重要だが、食べ方もがん予防や、健全な子どもの成長に大いに関連がある。

そして「喫煙と肥満はがんのはじまり」とあるが、特に肥満には食べすぎることと食べ方、運動不足が関係する。多くの食物を「よく噛まずに流し込んで食べる」、早食いとよばれる食べ方が肥満をまねく。問題は、これらの生活が習慣化し、知らず知らずの内に永い時間経過の中で蓄積され、生活習慣病、がん、認知症など、さまざまな高齢者の疾患につながっていくことにある。その予防の出発点は子どもにある、といえよう。

従って、教育現場での「生きる力を育む健康教育の推進」はきわめて大切である。また子どもにそれを推進していくためには、教師、校医、歯科医、歯科衛生士等による定期的な健康教育や口腔ケアを習慣化させ、子どもの健全な発育を支え、将来のがんを含む重大疾患の予防につなげることが、小学校で日々教育され、実践される必要がある。ここに「行政の立場」が深く関わってくるのは必然であろう。

まだ演者の皆さんの抄録を拝見しないうちにこの抄録の提出を求められたので、とりあえずこんなことを考えてみた。当日は、演者とのやりとり、会場においでの方の聴衆の皆様との質疑を通じて、なぜ「小学生のがん予防教育」が大切か、の認識を深める機会となることを願っている。やや出たところ勝負の感はあるが、筋書きがない分、活発な討論となることを願うものである。

・・・・・・・・ MEMO ・・・・・・・・



UICC(国際対がん連合)日本委員会事務局
〒135-8550 東京都江東区有明 3-8-31
公益財団法人がん研究会 交流センター内
TEL 03-3570-0542
FAX 03-3570-0546
<http://www.jfcr.or.jp/UICC/>

UICC 世界対がんデー2014 公開シンポジウム事務局
〒514-8507 津市江戸橋 2-174
三重大学医学部公衆衛生学教室内
TEL 059-232-1111(内線 6372)
FAX 059-231-5012
<http://www.hosp.mie-u.ac.jp/epidemiology/>